ICT 海外ボランティア会会報

No. 30

2012 年 2 月 24 日（金）

Home page　：http://www.ictov.jp/
e-mail　　：sv@info.nttob.org

目次

◆ 特別寄稿

失敗を成功に転ずる（真藤語録からその５）

本会顧問　石井　孝　氏

◆ ＪＩＣＡ・ＳＶ募集説明会案内

事務局

◆ 特別寄稿

ふたたびのスリランカ

田上インターナショナル代表

田上　智　氏

◆ 会員リレー寄稿（第１６回）

カバパーティ ―トンガの伝統文化

元ＳＶ・トンガ　村上 勝臣　氏

◆ ＪＩＣＡ「メールマガジン配信登録」のおすすめ

事務局

特別寄稿

失敗を成功に転ずる

本会顧問　石井　孝

【元ＮＴＴ社長 真藤 恒氏の語録】

意思というと、「せねばならぬ」という一つの義務感がでてきてしまう。そうではなくて

自分は「こうしたいんだ」というように一人ひとりがなっていけば、目標管理が徹底したということである。

個人個人の意思が、ある一つの目標の方向に頭を揃えるということがマネージメントであって、その人自身がそういうふうな気持ちで動いていくということによって、企業組織としての本当の力が出てくる。

どうしてはならぬとか、おまえたちはこれに従えというのではまずいと思う。

「東京丸」という当時世界最大の十五万トンのタンカーは、いまでも非常にグレードの高い船として知られているが、実際には企業としては大失敗だった。しかし、その失敗があったから、その次はそれをベースにして非常に楽にできた。

たとえば中堅幹部を教育する場合でも、整ったバウンダリーだけに置くとイージーに流れるから、意識的にひどい目に合わせると、力のある者はそこからかえって大きく開眼する。自信がついて次の仕事に対しては、ずっとグレードが高くなる。人間としてのポテンシャルも非常に伸びる。

ただ、ときどき自分の組織のポテンシャルを見間違えて、大失敗することもある。しかし、問題は失敗したものを次にどう生かすかということが大事である。単に平面的に責任を追及するということでは企業は終わりである。

それを始めたら、だれもリスク（危険）をおかしてまで、トライしようとはしなくなる。

真藤さんは、やる気でトライし、その結果の失敗に対しては決して叱らず、こころもち表情を和らげ「もっと頑張ってみろ」となにくわぬ顔でいう。これに参ってしまうのである。

かといって、成功してもニコニコして褒めることもしない。むしろ、また厄介な宿題を出す。しかし、やった者自身は満ち足りた達成感がこみ上げる。実に不思議な人であった。

この語録でも、「自分の組織のポテンシャルを見間違えて・・・」といっているが、本音は、「自分のポテンシャルを見間違えて・・・」と言いたいところを、本気でやって失敗した時は、こういう言い方で庇ってくれる優しさがあった。

ＪＩＣＡ・ＳＶ募集説明会案内

ＪＩＣＡ シニア海外ボランティア

平成２４年度春募集体験談及び説明会の開催

事務局

標記についてＪＩＣＡより発表がありましたので紹介いたします。

ＪＩＣＡのＳＶ春募集は４月１日（日）より５月１４日（月）まで行われます。それとほぼ並行して、ＪＩＣＡの体験談及び説明会が開催されます。この会は大変有意義で、「ＪＩＣＡボランティア合格者の８０％以上が体験談及び説明会へ参加しております。」

また、参加者の声として、「説明会を聞いてＪＩＣＡボランティアになりたいと思いました」「説明会でＯＢの話を聞いて、自分でも出来ると思いました」「個別相談でＯＢのアドバイスを聞いたことで、合格できたと思います」等が聞かれます。最寄の会場でお聞きになることをお奨めいたします。（「　　」はＪＩＣＡホームページより引用）

開催予定は次表のとおりです。

都　県	開催地	開 催 日	時　間	場　　所
埼　玉	大　宮	4月 4日（水）	15:30	大宮ソニックシティホール
	大　宮	4月 11日（水）	15:30	大宮ソニックシティホール
東　京	市ヶ谷	3月 29日（木）	15:30	JICA 研究所国際会議室
	広　尾	4月 7日（土）	10:30	JICA 地球ひろば
	広　尾	4月 21日（土）	10:30	JICA 地球ひろば
	吉祥寺	4月 10日（火）	15:00	武蔵野公会堂
	新　宿	4月 12日（木）	15:00	ベルサール西新宿
	新　宿	4月 26日（木）	15:00	ベルサール西新宿
	八王子	4月 17日（火）	19:00	八王子市学園都市センター
神奈川	桜木町	3月 25日（日）	10:30	JICA 横浜
	桜木町	4月 15日（日）	10:30	JICA 横浜
	相模大野	4月 19日（木）	15:00	グリーンホール相模大野

（JICA ホームページを基に作成）

・交通機関等詳細については、ＪＩＣＡのホームページをご覧ください。

・他の道府県についても、ＪＩＣＡのホームページをご覧ください。

特別寄稿

ふたたびのスリランカ

田上インターナショナル代表　田上　智

午前７時、「ガキーン、ガキーン」という銃声で目が覚めた。祝日を祝う爆竹のパン、パンという軽やかな音でなく、実弾が発射された際の独特の金属音のようなその音は、アフリカで何度も聞いて知っていたからである。前夜午前２時までガラダリホテルのカラオケで思い切り発散した後だから、ポーヤデイ（満月の夜の祝日）の静けさを打ち破るそのうっとおしい小銃の金属音に、早く収まってくれとぼんやりしてベッドに横たわっていた。次の瞬間、ドカーンという爆発音とともに「内戦だ」と気が付き、とっさにベッドの窓から反対側に身を伏せるように床にうつぶせになり、両手で頭を押さえていた。職業軍人であった父から爆風の怖さは何度も聞いた。「頭を押さえないと首を吹き飛ばされるぞ」。おそらく爆発は再びやってくる、その時、首どころかホテルそのものが崩壊するかもしれないという不安が一瞬よぎる。次の瞬間、耳をつんざく大爆発が起き、同時にビルが左右にゆっくりと揺れる。これでいよいよ「コロンボに死す」か？ 果たして、銃声が鳴りやまない外に出るのが良い

のか、そのままここで待機すべきなのか？情報が何もないのでじっと頭をおさえたままの姿勢で３０分ほど待つほかなかった。

銃声がひとまず収まり、廊下の方で声がする、後からオーストラリア人と分かったのだが、家族連れの若い男が「アメリカ大使館に電話する」と言って情勢を摑み始めたのがわかった。５歳ぐらいの娘が恐怖の時間から解放されたからか、我に返って大声で泣き始めた。そのうち、ぞろぞろ宿泊客が廊下にではじめ、自分もその仲間となり、そのまま議論の輪の中に入った。散発的に銃声が続く。ようやく退避命令が出てホテルからひとまず出ることになった。部屋に戻って部屋をあらためて眺めるとその惨状たるや凄まじい。爆発に面した窓ガラスは見事にカーテンごと全部吹っ飛び、部屋のドアそのものも廊下まで吹き飛ばされ、ドアノブそのものもポロリ下に落ちている。壁はガラスの破片があちこち突き刺さっている。ふと気が付くと、パジャマが血で上から下まで真っ赤に染まっている。ガラスの破片がささった手のひらから鮮血が一条スーッと腕を伝って流れ落ちている。

避難先の海岸に集結した宿泊客のなか、例のミスター・オーストラリアの家族と一緒にアメリカ人の集団に交じっていたが、そのうち、その集団をめがけて眼鏡をかけた短パン、ポロシャツの太っちょのおじさんが息せき切って走ってきた。「アメリカ大使です。皆さんの生命と財産は守ります」という力強い言葉。日本大使はいずこに？ 結局日本大使は来ず、のちに退避先となったヒルトンホテルに髭面の三等書記官と思しき若い衆が「ここに名前、部屋番号と日本の連絡先をお書きください」とボール紙の板に白紙の一覧表を挟んだものを持ちまわっていた。

１９９７年１０月、シンハラ人とタミール人の間の内戦が激しかった時期、スリランカテレコムに投資を決めたＮＴＴから経営陣の一員として調査に来たときこのテロに遭遇したのだ。その月の２日にテレビ朝日ニュースステーションのレポーターとして最後の特集をオンエアーして、スタジオの例のブーメラン・テーブルで横に座っていた久米　宏から「それでは、セイロン紅茶でも飲んで頑張ってください」と送り出されてから２週間後の出来事だった。結局死者５名、重軽傷者合わせて５０名以上を数え、ＮＴＴ、近畿通信建設（現コミューチュア）からの出張者も数名がケガで病院に収容された。その夜、ニュースステーションのトップで「戦争報道」を久米　宏との電話での対話形式でレポートした。この時の視聴率が実に１７％で通常の平均１２％をはるかに上回り、その日の番組反省会で、めったに人をほめない久米　宏が私のレポートぶりを絶賛していたそうだ。

それから２年間、ＣＦＯ（最高財務責任者）としてスリランカテレコムに勤務し、経理の他、人事、労務対策を担当した。最高財務責任者ではあったが、ほかに経理局長もいたため、むしろ、人事、労務方面にウェートを置いた。その時導入した業績評価制度はいまでもそのまま運用されているそうだ。３０もの数の労働組合相手にほとんど毎日のように交渉もしていた。在任中、爆破テロがやまず、スリランカテレコムのセキュリティー担当にもなったが、工事の安全や交通安全ではなく、「軍事上の安全保障担当」だったわけで、日本大使館のみならず、情報量の莫大なアメリカ大使館からも軍事情報を収集したりした。実際、スリランカテレコムのゲートには現役の陸軍兵士が土嚢をつみ銃を構え、構内に入る車のチェックは厳重であった。民間のガードマンも雇い入れその労務対策にもあたった。日本人会は当然だが、アメリカ人会にも密かに参加していた。幾人かの労組委員長とも仲良くなり、自

宅にも遊びに来たり、去る時には、連日送別会を開いてくれた。個人的にもドイツ系スリランカ人秘書が愚息と結婚し、子どもともども今日本に住んでいる。在任中は、セイロン紅茶とサファイアなどの宝石を堪能した。まさに公私ともにスリランカとは切っても切れない仲になったわけである。当時は、検問所があちこちに設けられ、兵の姿がやたら常に目についた。その後は、一度、ミヒンタレーという島中央部の仏教遺跡にインドのブラーマン文字の研究に訪れたが、それ以外、ビジネスでは訪れていない。このブラーマン文字、国立民族学博物館の教授から、かつてスリランカにはギリシャ人の集落があったと教えられ、岩の上に刻まれたギリシャ文字とそっくりな彫りに関心を寄せたわけである。結果、それはギリシャ文字でなくインドのブラーマン文字でサンスクリットや梵字の基礎となったものだとわかった。文字から見ても、西方の三大文明は、互いの影響度が大きく、四大文明のうち中国だけがあまりにも異質なものだと言えるだろう。

２００９年５月、ついにスリランカ政府と反政府過激派組織タミル・イーラム解放の虎（ＬＴＴＥ）との内戦が終結、今回ビジネスで訪れたスリランカの風景はすっかり変わった。ホテルとスリランカテレコムにしか居なかったが、まず目に付くのは中国人の存在。空港でもホテルでも中国語が飛び交っている。ホテル内の宝石商ザムは友人だが、「昔は８０％が日本人のお客だったが、今は中国人がその比率だ」という。余談だが、日本の御徒町のザムの支店は福島の原発事故で引き揚げたという。それと、兵士の立っている検問所が極端に減って、ほとんど目につかなくなった。タミールの拠点だったジャフナも今は全く治安上の問題はない。コロンボからの飛行機はいつも満席だという。　　（了）

会員リレー寄稿 第１６回

カバパーテイ ―トンガの伝統文化

元トンガ・ＳＶ（2006.4～2008.4）　村上　勝臣

私はトンガ在勤中機会あるごとに参加したが、カバパーテイはトンガの伝統文化と言えると思う。公式の行事として王宮でも開催されるし、官公庁、会社、集落でも開催される。勤務先のＴＣＣ（トンガ通信会社）でも毎月開催されていたので勿論毎回出席した。出張先の離島でも仲間に誘われて集落パーティに４回出席する機会を得た。

エイッと、日本の文化にあてはめれば、さしずめ茶道のようなものであろうか。

１．パブリックカバパーティ

夕方６時ごろになると、仕事も、年齢もさまざまな男達が、海風の吹き抜ける集会場に集ってくる。トンガは集落で成り立っているからどの島にも点在する集落には、かならず集会場と教会がある。

この集会場で開催されるパブリックパーティは週に１回行われるようである。集合時間がキチット定まって居る訳でもなく、集まった者からカバ鉢を１つ囲み車座になってカバを酌み交わし始める。

カバはトンガの木の根から取った粉で白いパックに入れて水に浸して抽出しカバ鉢に移して椀で汲んで回し飲みするのだ。(写真１)

写真１　カバ鉢と椀

同期のＳＶでトンガテレビに勤めるＮさんの言葉を借りると「あれはね、大田胃酸という粉薬があるがあれを水に溶いて飲むような味だ」。けだし的を得た説明であると納得した。

時間が経つにつれて、その車座が膨れて１４，５人を越すと分裂して別の車座ができる。

８時ごろになると、いつの間にか座は１０を越す数に成長する。(写真２)

カバはココナツ椰子の実でできた１合位の鉢に汲まれ、遠い人から順番に手送りで送られて酒を干すように手頃な速度で一息に飲み干される。一渡りすると又、雑談が始まり、５分おき位にカバ回しが行われる。

彼らは雑談しながら情報交換する。日本流に言えば茶飲み話である。従って話の内容も政治の話から集落の話題などなんでもござれである。話題は多岐にわたるが話し手はその中にジョークを入れて座を爆笑に導かなければならないようだ。ザツネタの例を示すとこうである。

写真２　パブリックカバパーティ風景

たまたま私がＴＣＣの仲間に旅先で紹介した日本の「銭湯」の話が話題に上ったことがあった。ババウという首都のあるタプ島から北へ９００キロほどの島へ線路設計に出張へ行ったときのことである。仕事を終えた夕方、ホテルのプールで２人の仲間は水浴びをした。彼らは海水パンツを持ち合わせなかったこともあり、作業に着ていた半ズボンと肌着を着たままプールへ入った。正に水浴びだ。彼らは肌を大衆に晒さない習慣があるようだった。私は水浴びはせず、プールサイドでビールの小瓶を３本買ってみんなで飲みながら雑談した。

何の風の吹き回しか私は日本の銭湯について紹介した。

「パブリックバスではお互い素っ裸で入浴するんだ」。それを聞いていた１００キロを超す大漢の２人はチョッとビックリした様子であったがその後、腹を抱えて笑い出した。さらに私は「田舎の温泉のパブリックバスでは男女混浴もある。勿論みんな素っ裸だぜ。これは日本の古くからある伝統文化だね」と追加すると、２人は顔を見合わせて１０分ばかり笑いこけた。

その晩。私の朋友でトンガ語通訳してくれるエサフェはカバパーティでそれを紹介し、暫くは座をどっと沸かせた。一般的にはこうした文化は日本独特のものだから、暫く彼は

私が去った後も島巡りをして「銭湯ネタ」をトンガ中に振りまくだろうと思った。

午後九時ごろになると、若い独身女性がカバ汲みを勤めるため、各グループに、１人ずつ座る。

座は一層盛り上がる。

九時半ごろになると、ギターを抱えた歌い手が加わる。（写真３）

写真３ カバ酌み女性とギター弾き

彼らは手近なグループに入り込んで歌い始める。

トンガの伝統歌だそうだ。総じてトンガのメロディーはハワイアンと共通しているように思う。

集会場一杯に響く。

この頃になると、ある者は歌を唱和しある者は、雑談を続けるから大衆酒場の様な雰囲気を呈してくる。

深夜１２時近くになると、主催者が挨拶を始めると座は水を打ったようにシンとなる。

挨拶中「マロ（有り難や)」という声が参集者の中から、起こる。

そして「アーメン」と全員で祈り、それが終ると何事も無かったように、又喧騒の渦が起こる。

星が未だ出ない夕暮れ時に、集会場の粗末な部屋へ、週１回、島の男達は集う。

今日、昨日あった事を告白し、そして笑い、余りストレスも無さそうに見える明日の生活へ向かって家路に着く。午前２時はまわっている。その時間になると、本物の満天の星達が彼等の敬虔な、不思議な白い時間に祝福を贈るのである。

２．トンガ人爆笑のルーツ

写真４ 戦闘の躍り（カルチャーセン

トンガ社会は、何時もジョークの言い合いが日常生活の中にある。彼らは爆笑の種をカバパーテイでテストしているようにさえ感じた。

勿論、勤務先のＴＣＣでも折に付けてお互いジョークを飛ばし仲間を笑わせる。ゴルフ場にも毎週通ったがトンガ人はゴルフ中でもジョークを飛ばす。

これは狩猟民族である彼等の祖先は、嘗て小さな小船で南太平洋を渡り、散在する小島にたどり着いた頃から端を発しているではないかと私は思うのである。

生死の境界を常に隣併せにして小舟で大洋を渡る旅で、お互い信じあうために、冗談を言って仲間へ信頼を伝える。ジョークで常に側にある危険を吹き飛ばす。これが長い歳月を経てカバという伝統民族祭事に形づくられて今に伝わってきているのではあるまいか

と、これは私の想像であるが。

トンガ政府が経営するカルチャーセンターでトンガの伝統芸能を紹介している。

男衆ダンサーが踊る民族踊りは概して外敵と戦う戦闘の動きの速い男性的な踊りだ。歌舞伎の振り宜しく勇敢な猛々しいダンスである。声を発しながら勇敢に踊る。今にも外敵に躍りかからんばかりの迫力で踊る。（写真４）

３．カバーパーティあれこれ

カバパーティは、前述のとおり各職場でも開催されるし事実ＴＣＣでは毎月職場パーティが開催される。仕事が終わる頃「カミ、今夜はカバをやるぞ」と相棒から声がかかる。私は「ＯＫ」と答える。（写真５）

写真５ TCC カバパーティ

王宮でもカババーティは開催される。私は出席できなかったがトンガテレビのＮさんから情報を貰った。（写真６）

また、エサフェの説明によると、トンガ人が多く住むニュージランド、カリフォルニアなどでもトンガからの訪問客があると友人知人が集まってカバパーティを開催するそうである。

写真６　王族カバパーティの招待者（N氏撮影）

勿論隣近所、隣人同士でも開催されるようで事実、私はＴＣＣの社宅で２年間過ごしたが西隣では週に２回くらいは開催していてカバの謡が聞こえていた。

科学的なことは厳密にわからないが、カバの粉には脳を刺激する成分があり、６時間も飲んでいると酔った気持ちになるようである。私も毎回そういう酔ったような気分を味わった。その代わり、入れ替わりで放尿へ出かけなければならないのも事実である。

４．カバーパーティにみるトンガ気質（おわりに）

パブリックカバパーティで深夜１２時ごろ、主催者が挨拶するが、その際彼は、その晩のドネーションの金額を報告する。私もエサフィのアドバイスに習ってその都度パンガ紙幣をひねってカバ鉢の周辺に投げた。多くの参会者がやる。

朋友エサフェの説明によると彼の住む集落でも毎週パブリックパーティが開催され集まった金を孤児とか、貧しい人たちに寄贈するという。

トンが勤務中、タプ島に日本のサラリーマンを退職し年金滞在をしているＹさんとときどき会った。彼は「いやあ、私の周りには無職でぶらぶらしている若者が一杯いるね。彼らは平日は近所の家から、タロイモをわけて貰って食をつなぎ、日曜日は教会へ行ってご馳走になる。のんびりしていますねえ」と言っていた。

海外出稼ぎ、海外移住の親戚から送金を受けて生活している住人が多いのも事実である。
私は両替所に行くと、「送金受領カウンター」があるのを見て当初は驚いたが、離任するころには納得した。

メールマガジン配信登録」のおすすめ

事務局

当会顧問・ＪＩＣＡ青年海外協力隊事務局募集課長 佐藤　睦氏からのおすすめです。
ＳＶおよびＪＯＣＶ募集案内等情報満載の「メールマガジン配信登録」をしてください。きっと皆様のお役に立つと思われます。

手順は次の通りです。

① Internet Explore で「JICA」を検索
② 「JICA-国際協力機構」を選択し HP を開く
③ 右手の JICA ボランテイアをクリック
④ 情報満載メールマガジンをクリック
⑤ メールマガジン配信登録をクリック
⑥ 所定の個人情報を記入

- (http://www.jica.go.jp/volunteer/index.hotmail)

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。
それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集部　加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) ,または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

・ 今年も春到来と共に、ＳＶ募集が始まります。それに呼応して開催されるＪＩＣＡによる体験談及び説明会の日程を掲載しました。今回から語学試験のシステムに変更があるとのことです。そんなこともあり、是非説明会に足を運ばれることをお奨めいたします。私もかってこの説明会に参加し、応募を決意したことを思い返しております。
またほぼ同時に　ＮＰＯ･ＳＶ経験を活かす会 の“よろず相談会”も開催されます。詳細は次号の会報で紹介しますので、合わせてご活用ください。

・ 今号も石井　孝様の“真藤語録”及び田上　智様の特別寄稿をいただきました。共に含蓄の溢れた内容です。もうお馴染みになりましたが、一回限りの会報掲載では勿体無いので、当会のホームページ（http://www.ictov.jp/　又は“ＩＣＴ海外ボランティア会”で検索）に、今までのものも含めて掲載いたしております。“リレー寄稿”も同様です。合わせてご覧いただければ幸いです。（以上 加藤隆）

総編集長　：ICT 海外ボランティア会　事務局長　加藤　隆
編集長　：ICT 海外ボランティア会　報道部長　　村上勝臣
発行　　：ICT 海外ボランティア会　（メール：sv@info.nttob.org/）